

平成27年度

病害虫発生予察特殊報(第4号)

平成27年 12月 4日

神奈川県農業技術センター

病害虫名：トマト退緑萎縮病

病原名：*Tomato chlorotic dwarf viroid*(TCDVd)

作物名：トマト

1 発生経過

- (1)平成27年10月、神奈川県内のトマト栽培施設において、退緑、黄化を伴う縮葉症状が発生し、著しく生育抑制された株が認められ(図1)、*Tomato chlorotic dwarf viroid*(TCDVd)に感染していることが確認された。
- (2)本病害は、国内では平成18年に広島県、平成19年に千葉県で確認された報告があるが、終息している。本病害の神奈川県内での発生確認は初めてである。
- (3)発生が確認された施設では、3の防除対策を徹底することにより、施設外へのまん延を防止している。

2 病徴および生態

- (1)上位葉の退緑(図2)、黄化、縮葉症状(図3)、花器官の奇形(図4)などが発生し、節間がつまることによる株の著しい萎縮により、収量低下または収穫を見込めなくなる。
- (2)本病は、手指やハサミ等の器具による栽培管理作業で容易に伝染する。
- (3)罹病品種では、汁液接種による潜伏期間は約23日で3~4週間である。
- (4)本ウイルスは、汚染株から採取した種子の外皮に付着することが知られているが、国内においてトマトで種子伝染した例は確認されていない。
- (5)コナジラミ類等の微小害虫による媒介は現在のところ確認されていないが、マルハナバチの受粉活動によって媒介されるとの試験報告がある。
- (6)主にトマトで、それ以外には海外でパーベナ及びペチュニアでの感染(無病徴)の報告がある。

3 防除対策

- (1)健全苗を定植し、ほ場の見回りを徹底し、早期発見に努める。
- (2)発病株は見つけ次第抜き取り、埋設処分などを行い、二次感染の防止に努める。
- (3)摘芽、誘引などの作業等においては一定の間隔で手を洗い、ハサミ等は頻繁に次亜塩素酸ナトリウム溶液により消毒し、収穫・管理作業による汁液伝染を防ぐ。
- (4)収穫終了後の残さ及び資材は適切に処理する。



図1 TCDVdが感染したトマトの縮葉症状



図2 上位葉の退緑

(広島県立総合技術研究所農業技術センター提供)



図3 黄化、縮葉症状

(広島県立総合技術研究所農業技術センター提供)



図4 花器官の奇形

(広島県立総合技術研究所農業技術センター提供)

神奈川県農業技術センター 病害虫防除部
〒259-1204 平塚市上吉沢1617
TEL 0463-58-0333 FAX 0463-59-7411
<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f450002/>